

古今東西、昔から伝えられているおとぎ話から現代の映画やマンガまで、お金や経済にまつわる物語は数え切れないほどたくさんあります。今回は、中国から3世紀に伝わったといわれ、日本文化にも大きな影響を与えている「論語」を取り上げます。

### 第6回

## 「論語」

### お金にまつわる孔子の教え

論語は、中国の春秋時代、紀元前6世紀から5世紀に生きた孔子とその教えを受けた弟子の言葉や問答を集めた中国の書物です。全20編で構成されており、道徳や礼儀、政治、学問や人としての生き方についてエピソードとともに記されています。『義を見てせざるは勇なきなり』など、現代の私たちにとっても生き方の指針となる有名な言葉が数多くありますが、その中には、今も昔も人生とは切っても切れないお金に関する教えも少なくありません。

例えば、

『君子は義に喩り、小人は利に喩る』

という教えは、

「君子は正しい道かどうかが、小人は損得で物事を判断する」

という意味ですが、会社の社長さんの座右の銘によく挙げられています。「儲けることばかりに懸命になり、誠実に商売することを疎かにしてはならない」といった、経営上の教えと解釈しているわけです。

また、

『疏食を飯い水を飲み、脰を曲げて是れを枕とす。樂しみ亦其の中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し』

これは、

「粗末な食事を食べて肘を枕に眠る、そんな生活の中にも喜びはある。不正に金を儲けて高い地位を得る、そんな生き方は浮雲のようにはかなく感じられる」

といった内容ですが、正しく志を持って生きれば、貧しくともハッピーであると喝破し

ています。

他方で、

『富と貴とは、是れ人の欲するところなり。其の道を以てこれを得ざれば、処らざるなり』  
という言葉は、

「財産と高い身分は誰でも欲しがって当然である。しかし、人として正しい道を経た結果でなければ、何の価値があるというのか」

と、人が地位やお金を得ようとすること自体は当たり前のこととしてすんなり認めています。

人の世の現実を理解したうえで、正しく生きることを読んだ「論語」。それが、いつの時代も色あせず、私たち現代人の心にも響く理由なのでしょ。

